

Mokṣadharmā に見られる bhūtātman

茂 木 秀 淳

1. Mahābhārata (略号 MBh.)¹⁾ XII章 Śānti-parvan の Mokṣadharmā (略号 MDh.) 章は体系化以前の種々の宗教・哲学思想に言及しており、Sāṃkhya 学派を初めとする諸学派の初期の様相を知るのに重要な資料である。MDh. は七千を越える詩節からなる膨大なもので内容解明も未だ十分とは言えない。MDh. の内容解明の基礎的作業として、そこに現われている個々の概念を検討し、その内容をできる限り明らかにすることが必要である。MDh. は輪廻からの解脱を主題とするため、そこには puruṣa を始め靈魂、自己、個我を表わす語が輪廻と解脱をめぐる多数現われ、その内容も一様ではない。ここでは、それらの諸概念の中から bhūtātman を取上げて検討することにしたい。以下 bhūtātman が用いられる箇所を文脈と共に示しながらその内容を吟味していくことにする。

2. MBh. XII. 187.6

MDh. において bhūtātman が最初に表われるのは187章である。Yudhiṣṭhira によって adhyātma について質問された Bhiṣma はまず、生き物を形成している地・水・火・風・虚空を挙げ、生き物はこれらの五元素から生じた死ねば五元素へと帰滅すると説く。その様子を海と波そして亀の四肢の譬喩を用いて説明するのであるが、bhūtātman は亀の四肢の譬喩の中に「亀が四肢を伸して再び引っ込めるように、そのように bhūtātman は生き物 (bhūtāni) を創造して再び引っ込めるのである」というように用いられている。ここは人間を構成する諸要素として身体の各部分、知覚器官、心理器官そして ātman が列挙される箇所である。最初に生き物を形成する五元素が列挙され、目や耳などの知覚器官が五元素からなることが示され、心理器官として manas と buddhi そして最後にその統轄者として kṣetrajña あるいは jiva が述べられて、人 (puruṣa) を構成するものすべてが示されたことになっている。bhūtātman は「生き物を創造する者」とのみ用いられている。しかし Bhiṣma は五元素に先行する創造者に言及していない。述べられているのは生き物の身体が五元素から生成消滅することである。従って、生き物を創造するのは五元素であり、ここでの bhūtātman は五元

素を指していると思われる³⁾。

3. MBh. 12. 196. 6-7³⁾

Mdh. 194-199章は Manu の教説として一連の内容を伝えているが、196章以降で人間の本質が問題とされている。人には知覚を記憶している者が存在するとされ、そのような認識の主体を呼ぶのに svabhāva, śaririn, kṣetrajña の語と共に bhūtātman が用いられている。Manu はそのような存在は目に見えないから存在しないとは言えない、と新月や月の裏側の譬喩を挙げで説明する。「月の裏側が知覚されないから存在しないとは言えないのと同様に bhūtātman は存在しないとは言えない」と説くのである。さらに bhūtātman のあり方は「生き物の中に知覚されることなく存在し、微細にして知覚を本性とする⁴⁾」と表現されている。ここでは bhūtātman は人間の内部に存在する微細な認識主体としていわば肯定的に捉えられている⁵⁾。bhūtātman と他の類似の概念—svabhāva, śaririn, kṣetrajña など—はほぼ同意語的に用いられているようである。

4. MBh. XII. 200. 8, 11; 202. 29, 31

Mdh. 200-202章は Viṣṇu による世界創造を語っている。ここでは、bhūtātman は Viṣṇu 神を指すものとして用いられている。Yudhiṣṭhira は存在物の創造者である Viṣṇu について知りたいと質問する。Bhīṣma は Viṣṇu そして Kṛṣṇa の偉大さを讃えて、Viṣṇu による世界創造を語る。その中に bhūtātman は用いられている。Viṣṇu は最初に mahābhūta を創造するが、何故そのようなことが可能かという、Viṣṇu は「bhūta を本質とし (bhūtātmā), mahān を本質とするからである」(200. 8)。このように bhūtātman の語は Viṣṇu 神の創造者的性格を示す語として用いられている。Viṣṇu は最初の存在である Saṃkarṣaṇa を心に思い創造するが、Saṃkarṣaṇa はあらゆる生き物の依り所とされ bhūtātman とも呼ばれている (200. 11)⁶⁾。また202章では二つの詩節で Viṣṇu を称賛する同じ表現「mahāyogī bhūtātma bhūtabhāvanah」が用いられている。これらの章では bhūtātman は Viṣṇu やその分身的存在に対し存在物 (生き物) の創造者であることを示す語として用いられている⁷⁾。

5. MBh. XII. 231. 11. 12; 245. 11

この章では、心と感官を集中する手段について Śuka が問を發し、Vyāsa が yoga とそれを実修する人間像を示している。bhūtātman は、心 (manas) を制御する存在として現われる。この章においては、個々の人間は、五元素・五つの性質 (guṇa)・五つの感官・心そして bhūtātman から構成されている。そのため

bhūtātman は第十七とも呼ばれる。すなわち bhūtātman は個人を構成する諸要素の中で最も高い位置を占め、心臓の中にいて心を制御する存在であり、また yoga によって解脱すべき存在でもある。そして解脱の認識は、自分自身がすべてに広がっていることを認識することであり、それによって Brahman に達するとされている⁸⁾。同様の性格の bhūtātman は245章においても見られる。231章と同様、yoga の実修との関連で bhūtātman が言及される。yoga を実修する人の bhūtātman は「常に七種の微細なグナによって付き従われ、不老不死にして永遠に活動的である」(245.7) と表現されている。また、「manas と buddhi によって征服されると、夢でも現実でも快と苦を認識する。」(245.8) とも言われ、日常の経験主体としても考えられている。そのような存在である bhūtātman は、231章と同様、「心臓にいる」(245.11) とされ、さらにこの章では、atitejas の部分であると表現されている。すなわち、ここでの bhūtātman は個人個人に内在している永遠の存在であり、解脱に至るまでは日常的な苦楽を経験しつつ輪廻する存在である。その本質は atitejas すなわち人間を超えた存在と同一である。bhūtātman は、解脱の可能性をもちつつ輪廻する存在であり、絶対的存在と本質的に同一であると理解される。

6. MBh. XII. 286. 18

286章には輪廻するものであるが前述の用例と異なるニュアンスをもって bhūtātman が用いられている。279章から、Parāśara と Janaka の対話が始まり、人はいかなる行為をして幸福となるか、という問題から śreyas をめぐる議論が続く。この章では、殺生の禁止と死の不可避性から死後の様子が説明される。第14詩節と17詩節から、個人を構成する要素が理解されるが、それは五元素と manas と感官と ātman であり、最上位の存在は ātman である。第16詩節において身体を捨てる者は śaririn と呼ばれるのに対し、第18詩節では死後再生までの間の存在が bhūtātman と呼ばれ、そのあり方は「雲のように漂う」と表現されている。bhūtātman は死後一定の時間を経て再生するまでの存在である。従って、ātman の輪廻する時、生きている身体にいる時は śaririn、死後再生するまでは bhūtātman と呼ばれるとみなすことができる。bhūta の意味を「死後」に関連させて生じた用例であろう。

7. MBh. XII. 291. 34

291章の冒頭において Yudhiṣṭhira は、輪廻に戻らない akṣara そして輪廻に戻らぬ kṣara とは何か質問を發し、Bhīṣma は Vaśiṣṭha と Karālanaka の対話

を引用して返答する。Vasiṣṭha 仙は第33詩節まで種々の生き物の名称をあげ、第34詩節前半で「これらすべて vyakta と名付けられるものは滅する」とまとめ、後半で「bhūtātman は毎日 (滅するので) kṣara と言われている。」と述べている。ここでの bhūtātman は生きている人間の滅する部分という否定的意味合いで使われている⁹⁾。すなわち、低位ないし下位の ātman として用いられていると考えられる¹⁰⁾。

8. MDh. においては bhūtātman は、断片的ではあるが、以上のような現われ方をしている。これらの用例の中で、下位の ātman として否定的に現われる用法は Maitrayanyupaniṣad (略号 MaiU.) において見られる。MaiU. は、第2章で理想的存在である ātman について述べ、次の第3章でそれとは異なる下位の ātman として bhūtātman に言及している。中期 Upaniṣad には ātman を二種に分ける考え方が見られるが、下位の ātman として bhūtātman をあげるのは MaiU. のみである。MaiU. は、bhūta の語の解釈によって下位という意味を引き出そうとしている。その解釈は二通りあり、一つは bhūta を五種の tanmātra あるいは五元素という物質と解し、物質からなる身体的存在が bhūtātman と呼ばれると説明している。もう一つは、bhūta を abhibhūta と理解し、物質的性質に制圧されている。あるいは内的 puruṣa によって制圧されている、という解釈である¹¹⁾。

9. 以上のように MDh. において bhūtātman は、(1) 五元素、(2) Viṣṇu などの創造者、(3) 認識主体、輪廻の主体である個我、(4) 下位の ātman、というおよそ四通りの意味で用いられている。このような相違がなぜ生じたのか、その原因について少し検討しておく。広範な epic の用例のすべてを包含するような経過を推定するのは不可能であるが、以下いくつか可能な推理を述べて結論としたい。

(1) bhūtātman の意味の変化を考える時、年代的に MDh. に先行する MaiU. 3章がオリジナルの意味を伝え、それから他の意味が派生発展したと考えることができようが、そのようには考えにくい。MaiU. は下位の ātman の意味で bhūtātman を使っており、これが本来の意味だとすると、そこから創造者の存在を指すものへといわば上昇していかねばならないが、このような経過は後代に bhūtātman はより多く用いられることを予想させる。しかし epic の後 bhūtātman はほとんど用いられなくなるので、このようには考えられない。従って、MaiU. の用例がオリジナルなのではなくて、MaiU. より以前に bhūtātman

は用いられ、下位の ātman という MaiU. の用例もそこから派生したと考えるべきであろう。

(2) Mdh. において bhūtātman の用例は二つに分けられる。187章、200章に現われる bhūtātman は五元素や Viṣṇu という生き物を形成する。あるいは創造するものに対して用いられている。bhūtātman として独自の存在ではなくて他のものの性質を表わしている。それに対して個我や下位の ātman を意味する場合、bhūtātman はそれ自体固有の存在である。この相違から最初は「生き物の本体・本質」として他の創造者的存在を表わすのに用いられた語が、創造された生き物の本質の意味に転化し独自の存在となったという過程が推定できよう。

(3) 意味が多様化する原因の一つとして、MaiU. が複数の解釈をしているように bhūta の語の多様性が考えられよう。例えば、bhūtātman が bhūta (生き物) の本体として五元素を意味したことから、bhūta を五元素に理解し、五元素からなる身体という物質に関わりをもつ存在として下位の ātman へと転化したという過程も二種の ātman の思想との関連において想定できる。

(4) Mdh. にみられる bhūtātman の用例の中で、ある程度まとまった内容を伴って描写されているのは、輪廻するもの(個我)として用いられた場合である。このことは bhūtātman が大きな役割を演じたのは、個我として輪廻しヨーガによって解脱する者として現われる場合であることを示している。bhūtātman は Caraka-Saṃhitā においては行為主体やより高次の存在を意味し¹³⁾、Manusmṛti においては行為主体として用いられていること (XII. 12) も、この語は主として個我の意味で用いられたことを示していよう。

(5) 個我一个々人の本質的部分—を現わす語は、中期 Upaniṣad 以後 jiva や kṣetra-jña さらに puruṣa など多くの概念が現われるが、bhūtātman はこれらと同義語的に用いられ、用いられるコンテキストの相違によって多少のニュアンスの違いを伴いつつ、解脱に向う存在、輪廻する者、通常的行為主体というように用いられた。しかし、個我としての bhūtātman は、他の個我や最高存在をあらわす他の概念が優勢となる中で影響を失っていったものと思われる¹³⁾。MDh. 全体において現われる回数は少なく、現われ方も断片的であり、しかもその中でさえ写本によっては bhūtātman が他の語に置き換わっていることは¹⁴⁾、このような事情を反映していると見ることができよう。従って、bhūtātman がよく用いられ影響力をもったのはより古い時代であろう。

- 1) The Mahābhārata, for the first time critically edited by S.K. Belvalkar (1954) Poona.
- 2) Cf. E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, (1901) New York (reprint 1978 Delhi), p.157; F. Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, (1965) London, p.256, fn. 1. MBh. XII. 239.4 が 187.6 とパラレルであることは既に指摘されている。しかしそこには bhūtātman は用いられていない。
- 3) この章に先行する 194.1 の Yudhiṣṭhira の「bhūtātman とは何か」という問の中にこの語は現われるが、この章では bhūtātman は言及されない。
- 4) jñāna-ātmavān という語はわかりにくいだが、後に知識対象は知識によって知られる、すなわち知識の対象と認識手段は同一であるという議論があるので、bhūtātman が認識可能であるためには知識という本性をもっていなければならない、という意味か、あるいは記憶を可能にするという性質を表現するためのものか。(cf. Hopkins, op. cit., p. 40, fn.2)
- 5) 内部に隠れた本来の自我を表わす用例は MBh. III. 203.34, また Tripurātāpiny-upaniṣad 5.12(=Brahmabindūpaniṣad 12) にも見られる。
- 6) この箇所は bhūtātman ではなくて bhūtāni と読む伝承もある。
- 7) Viṣṇu の epithet として用いられる用例は他に何箇所もある。(cf. MBh. XII. Appendix I, No. 16, 27; MBh. XIII. 135.140=Śarabhopeniṣad 24; Gopālottaratāpinyupaniṣad 最後の帰依句 13) また Viṣṇu ではないが、創造者である Prajāpati (=aḥamkāra) を指す用法もある (MBh. (Bombay 版) XII. 313.12)。MBh. XII. Appendix I, No. 28, 316 (=Vāyupurāṇa (Ānandāśrama 版) 30.256) においては Śiva 神の無数に挙げられる epithet の一つとして用いられている。
- 8) MDh. にしばしば見られる sarvabhūtāmabhūta (あらゆる生き物の本性となった) という解脱を表わす表現はこの考え方を背景にしていると考えられる。
- 9) また MBh. XII. (Bombay 版) 204.5(=Poona 版 197.5) では、bhūtātman は「無知に満足し、対象に没頭したもの」と述べられ、人間の否定的ありかたを示している。(cf. Hopkins, op. cit., p. 41, fn.1)
- 10) 下位の ātman を表わす用例は MBh. XII. Appendix I, No. 26, 54 に見られる。ここでは paramātman と対比的に用いられている。Cf. F. Edgerton, op. cit., p. 256, fn.1.
- 11) Hopkins は MBh. (Bombay 版) XIII. 34.15 に見られる bhūtātman の「バラモンの言葉を聞き破滅しない人」を指す用例をこの bhūta の解釈と関連させている。(cf. Hopkins, op. cit., p. 39, fn.2)
- 12) Cf. Caraka-saṃhitā, śarīra-sthāna I.14. 57, 84, 155; N.8.
- 13) Cf. E.H. Johnston, Early Samkhya, (1937), London, pp.49-50.
- 14) Cf. MBh. XII. 197.5 (pūtātma), 200.11 (bhūtāni), 300.12 (sarvātma); XIII. 34.14 (kṛtātmano)

<キーワード> bhūtātman, Mokṣadharmā, Maitrāyaṇy-Upaniṣad

(信州大学助教授)